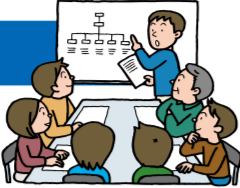


# 地域における防災活動のポイント

地域での自主防災活動の充実は大変重要です。地域における防災意識を高め、活性化と助け合いの仕組みづくりを図りましょう。

## ポイント① 地域内の情報把握

- 日頃から、**地域の危険箇所や防災上の問題点を把握し、住民と対応策を話し合っておく**ことが大切です。いざ災害となった場合、住民の安否確認や家屋等の被害状況はもとより、危険箇所がどうなっているかを確認します。そのことが二次災害を防ぐとともに避難経路の選定にも重要な情報となります。



## ポイント② 現地本部の開設

- 災害時における地域の防災活動の拠点として**町内会館等に現地本部を開設**することは非常に重要なことです。町内の一時避難場所としている組織も多いかと思えます。現地本部に行けば、何かの情報が得られる、住民の人がいて安心できる、そのような初動体制づくりに心がけましょう。



## ポイント③ 避難誘導活動

- 避難は**徒歩で、持ち物は最小限にし、両手が使えるように**荷物は背負いましょう。また、避難するときは肌を露出しないように**長袖、長ズボン**を着用し、**ヘルメット等で頭を保護**する。また、靴は底の厚い履き慣れたものとします。
- 避難誘導班の指示に従い、安全な避難経路を選定し、自主避難所に避難しましょう。
- 避難誘導班がない場合、家族や隣近所が**まとまって安全に避難**しましょう。
- 地域の被害状況や市からの避難指示により指定避難所へ移動する場合があります。



## チェックポイント 的確な状況判断・状況把握を

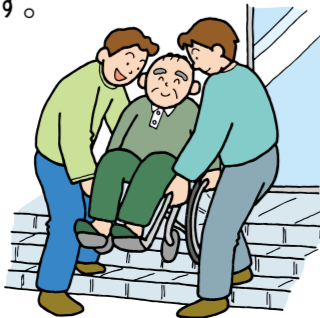
- 地域の危険性によって避難の方法が異なります。各町内でどのような避難行動が必要なのか、よく理解しておくことが大切です。
- 海岸近くの地域は、津波の危険性が非常に高いといえます。津波からの避難は標高が高い所ほど安全です。津波の際の避難場所も日頃から確認しておきましょう。
- 日頃から**自宅→自主避難所→指定避難所への移動経路**を確認し、危険箇所による変更経路なども想定しながら安全に避難しましょう。
- 情報の食い違いによる誤った避難行動は危険ですので、正確な情報を収集しながら行動するようにしましょう。
- 避難行動要支援者の支援については、事前に支援者を明確にしておき、逃げ遅れのないようにみんなで協力することが大切です。



## ポイント④ 避難行動要支援者支援活動

災害時に援護が必要な人は、ハンディキャップの内容や程度により支援内容はさまざまです。組織として、日頃から避難行動要支援者と交流を持ち、その人にあった支援計画を作成し、災害時に実践することが大切です。

- まず、**支援者を中心に避難行動要支援者の安否確認**をしましょう。けがや建物の被害がなくても精神的に不安定になりがちです。**笑顔で「だいじょうぶ」と声をかける**ことが大切です。
- 救出が必要な場合は、一人ではなく、**周囲の人の協力**を得て対応するようにしましょう。
- 避難方法や避難経路の選定には十分な配慮が必要になります。場合によっては、地元消防団や福祉施設等の協力を得ながら安全を確保します。



## チェックポイント 要配慮者の避難支援

### 【高齢者・傷病者の場合】

- 救助するときは、基本的に複数の人で対応します。
- 常に複数の救援者がいるわけではないので急を要する場合は、1人でも支援できるようにひも等を使って背負い、安全な場所へ避難します。

### 【目の不自由な人の場合】

- 「お手伝いしましょうか」などと**声をかけます**。
- 話すときは、**はっきりゆっくりとした大きな声**で話しましょう。
- 誘導するときは、**腕を貸してゆっくり**と歩きましょう。
- 誘導する際、進む方向等を示すときは、「右斜め前10m」などと**具体的に話しましょう**。また、時計の文字盤を想定して「2時の方向です。」などと説明してみてもよいです。決して、「あっち」「こっち」というような**混乱する表現は用いない**ようにします。



### 【身体の不自由な人の場合】

- さまざまな障がいがある人がいるので、支援計画に基づいた誘導方法に心がけましょう。
- 車いすの場合、階段では必ず2人以上**で協力します。上がるときは上向きに、下がる時は後ろ向きにして恐怖感を与えないように配慮しましょう。

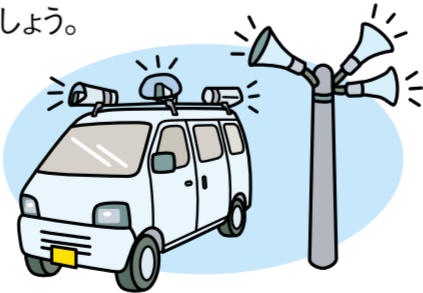
### 【耳の不自由な人の場合】

- 話すときは、近くまで寄って相手にまっすぐ顔を向け、**口を大きくはっきり動かします**。
- 口頭でわからないようであれば、**紙とペンで筆談**します。紙やペンがなければ、**相手の手のひらに指先で文字を書いて筆談**します。



## ポイント⑤ 情報収集・伝達活動

- 災害が発生すると、市は的確な災害対応をとるために、地域からの災害情報が必要になります。
- 自主防災組織はいち早く周囲の状況をつかんで、正確な情報を収集し、市へ報告することをお願いします。
- 情報収集班は、住民の避難状況、死傷者や建物、道路等の被害状況、火災の発生状況、生活情報等を収集します。
- 情報の収集先は現地本部**と決め、組織内で情報の一元化を図りましょう。
- 情報収集を迅速に行うため、**事前に調査区域ごとに担当者を決め**、地域内の被害状況等必要な情報を収集します。
- 災害時には噂やデマが流れがちなので、**情報はできるだけ確認**しましょう。
- 市へ報告する場合には、組織で担当者を決めておき、**矛盾する報告がないようにチェック体制**をつくりましょう。
- 市の同報無線や消防団による巡回広報、テレビ、ラジオで正確な情報を確認し、地域内の世帯に伝えて、**混乱が起こらないように**しましょう。



## チェックポイント 情報の共有・伝達は十分に

- 「被害なし」も災害の全体像をつかむための重要な情報です。定期的に報告しましょう。
- 情報伝達は簡潔に簡単な言葉とし、口頭だけではなく、メモ程度の文書も渡しましょう。
- 要配慮者(特に視聴覚等に障がいがある人、外国人)への情報伝達には十分配慮しましょう。



## ポイント⑥ 初期消火活動

- 火災を発見したら、大声で「火事だ!」と叫び、まず周囲に知らせます。
- 周囲の人と協力しながら消防署に通報するとともに、自主防災組織の現地本部や情報班にも連絡します。
- 消火班を中心として周囲の人の協力を得ながら消火活動を行います。
- 消火に用いる物品(消火器・消火用バケツ等)は、近所の家から持ち寄り、自主防災組織で整備している消火物品を使用します。
- 消火活動には、消火器具だけにとらわれず、状況に応じて、消火に使用できるもの(座布団等)を活用し、臨機応変に対応しましょう。
- 消火活動は、風上から行うこととし、火災や煙に十分気をつけましょう**。
- 地域で行う初期消火活動は、あくまで火災の延焼を防止することが目的**なので、決して無理はせず、危険を感じたらすぐに避難しましょう。
- 消防署・消防団が到着するまで時間を要することが想定される場合には、安全が確保される範囲内で消火活動を行うとともに、適宜、状況等を消防署に通報します。また、消防署・消防団の到着後は、その指示に従いましょう。



## ポイント⑦ 救出活動

- 負傷者の居場所等の情報を集めます。
- 発見した場合、周囲に応援を求めるとともに、挟まれている人に声をかけ、安心感を与えましょう。
- この原理を利用して、すき間を作り、挟まれている人の痛みを和らげるようにしましょう。
- すき間があれば、てこの代わりに自動車用ジャッキを使って持ち上げます。
- 被害者が挟まれている場所を確認し、作業の妨げとなる部分は、のこぎりやパールなどを使って取り除きます。
- 家具などの一部を破壊するか、中の収容物を取り除くなどして重量を軽くし、取り除きやすくします。
- 被害者に声をかけながら行い、不用意に引きずり出したりせず慎重に行うことが大切です。



## チェックポイント 救助作業時の注意

- 倒壊家屋やがれき等からの救助には、常に危険が伴います。**二次的災害を想定し、決して一人ではなく、周囲の協力者とともに救出活動**を行いましょう。
- リーダーを決め、手順を確認しながら作業を行いましょう。
- あらかじめ、手で取り除ける物をすばやく取り除き、がれきや土砂はスコップを使って取り除きます。

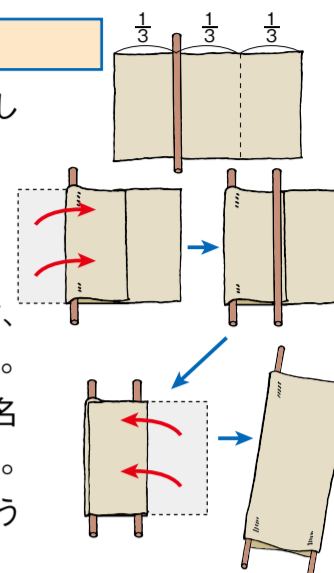


## ポイント⑧ 応急救護活動

すばやく確かな応急手当で次第で、回復や生命が助かる確率が高くなります。消防署が定期的実施する救命講習等を受講して、心肺蘇生法やけがの対処法を覚えておきましょう。

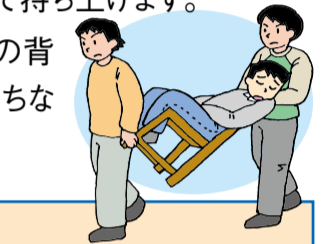
### 毛布と棒を利用した負傷者の搬送

- 毛布1枚と2メートルぐらいの丈夫な棒(物干し竿等)2本を準備します。
- 毛布を広げ3分の1のところ棒を置きます。
- 棒を包むように毛布を折り返します。
- 折り返された毛布の端にもう1本の棒を置き、その棒を織り込むように残りの毛布を折り返します。
- 原則として3名一組で搬送するものとし、1名が担架の横に付き負傷者の状況を確認します。
- 負傷者の足側を先にして、振動を与えないように、水平にして静かに運びます。



### 椅子を使った負傷者の搬送

- 負傷者を椅子に座らせ、前後また左右に位置し、椅子の枠をしっかりと持ちます。椅子を持ち上げるときは、腰を落として持ち上げます。
- 移動中は負傷者の状態を観察します。椅子の背中側を少し後ろに倒し、負傷者が椅子から落ちないように注意して運びます。



### 骨折に対する応急手当

- 骨折の部位を確認します。痛い部位を聞き、**出血**がないか確認します。
- 骨折しているところを固定します。副木を当て骨折部を三角巾などで固定します。(ショックに注意)
- 副木がない場合は代用として、**十分な硬さと適当な長さ、及び幅をもつもの**が使用できます。例えば身近にあるボール紙、新聞紙、週刊誌、板、戸板、棒、毛布、かさ、野球のバットなどです。

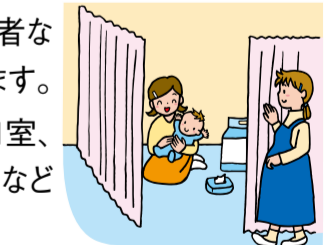


## チェックポイント 負傷者を発見した場合は…

- まず応急手当を行い、重症患者は病院又は市が設置した避難所内の救護所に搬送するようにしてください。

## ポイント⑨ 避難所生活

- 避難者全員がお互いに助け合い、協力して開設、運営にあたりましょう。また、地域の代表者を中心にまとまって行動しましょう。
- ついたて等で適宜プライバシーが確保できるようにします。
- 要配慮者のスペースを優先的に考え、高齢者などはトイレ等に行きやすい場所になるようにします。
- 要介護者や妊婦・乳幼児世帯などは、和室、冷暖房がある部屋などを優先して割り当てるなどの配慮も望めます。
- 避難勧告・指示(緊急)が継続している地域への一時帰宅は、災害対策本部の指示に従い行うことが必要です。



## チェックポイント 避難所では…

- 自主防災組織を中心に避難住民が互いに助け合い、協力して秩序ある避難生活が営めるように努めましょう。
- 要配慮者については、個々の実情を把握したうえで、きめ細かく支援することが必要です。
- ペットとの同行避難のため、ペットスペースの確保が必要になります。なお、ペットに必要なものは、飼い主が用意することが原則です。